

P1-054

発達障害児をもつ主養育者に対する保健師の支援 — 困難と工夫に焦点を当てて —

浅井 佳士

岐阜保健短期大学 看護学科

【目的】

本研究は、子どもへの虐待や不適切な養育が疑われる、またはその発生が疑われる発達障害児をもつ主養育者に対して、支援経験のある保健師のインタビューから、虐待や不適切な養育が疑われる発達障害児をもつ主養育者を支援していくための困難と工夫について明らかにすることを目的とする。

【方法】

対象は子どもへの虐待や不適切な養育が疑われる、またはその発生が疑われる発達障害児をもつ主養育者に対して、支援経験のある保健師に半構成的面接をおこなった。分析は、面接の録音データを繰り返し聞いて逐語録を作成し、虐待または不適切な養育が疑われる発達障害児と主養育者を支援する時の困難と工夫について、意味のあるまとまりのある文章を単位とし、データの言葉を生かしてコード化し類似性によりカテゴリー化をおこなった。なお研究を行うにあたり研究協力施設の承諾を得て実施した。

【結果】

保健師が発達障害児を育てる主養育者を支援する上での困難としては、《依存的で変動しやすい主養育者に対する心理的疲労》、《主養育者から得る不確かで部分的な情報に振り回される》、《他の主養育者では成功する支援方法が通用しない》、《自身の対応と虐待のリスクが関連することによる不安》の4カテゴリーが抽出された。また工夫としては、《困った時に頼りになる身近な存在であることを言動で示す》、《主養育者の不安や動揺を助長させないよう対応方法を統一する》、《継続的に支援できるよう心理的負担から身を守る》、《日頃から虐待のハイリスクであることを意識し子どもの安全を第一に考えて行動する》の4カテゴリーが抽出された。困難には、主養育者に合わせた臨機応変な対応が必要になることや、家族の支援が脆弱であり主養育者に対する支援者が見いだせないことなどが含まれた。また工夫については、主養育者の依存的態度や情緒の変動に対して、保健師は主養育者の不安や動揺を助長させないようにすること、また自身を心理的不安から守り継続的に支援をすることの異なる2点がみられた。

【考察】

保健師は、主養育者の不安や動揺を助長させないように、前向きな姿勢をもちながらも主養育者と一定の距離感を保ち、他機関や職場の保健師と協同して支援することで、必要以上に巻き込まれず自身の精神的安定を保ちながら、継続的な支援をしていくことが重要である。

P1-055

発達障害児のきょうだいが抱く思いと支援のあり方 — 発達段階に焦点を当てて —

浅井 佳士

岐阜保健短期大学 看護学科

【目的】

発達障害児と一緒に生活する兄弟姉妹（以下、きょうだい）の思いについての面接や聞き取り調査の結果が記されている文献を検討し、きょうだいがどのような思いを発達段階ごとに抱いているかを把握し、その思いに対する支援を検討することを本研究の目的とした。

【方法】

医学中央雑誌web版を使用し「発達障害児」「きょうだい」「思い」「支援」をキーワードとして論文を検索し、本研究の目的と合致した19文献を分析対象とした。選定した論文において、きょうだいの思いに関する記述を精読し内容を整理した。

【結果】

きょうだいの抱くマイナスの感情として幼児期では、親がきょうだいに目を向けることが多くきょうだいは親との関係に満足できていなかった。そのため、きょうだいに対して二番手であるという思いを抱えていた。学童期は、幼児期から連続して親の目がきょうだいに向くことによって二番手になっていると感じていた。また、きょうだいが小学校に通い始めることから友人との関係の重要性が増し友人からの目を気にするようになっていた。青年前期は、幼児期・学童期と連続して、親が肉体的・精神的にきょうだいの事で精一杯である為、二番手であるという思いを抱えていた。青年後期は、青年前期の発達課題である自己同一性の獲得がされておらず、きょうだいの受容ができない自分に対する葛藤を抱くと同時に、きょうだいに否定的な思いを抱えていても家族からの孤立を恐れ、感情抑制していた。きょうだいの抱くプラスの感情として幼児期では、親との関係が良好なきょうだいは純粋であると肯定的に捉えることができていた。学童期は、家族関係が良好なきょうだいは一緒にいることや遊ぶことが楽しいという思いを抱えていた。青年前期は、障がいを肯定的に捉えているきょうだいは何かの物事に対して熱心な点を尊敬することができていた。青年後期は、きょうだいの存在を肯定的に捉えてくれる人との出会いなど、様々な経験を経てきょうだいの存在を肯定的に受容できるようになっていた。

【考察】

幼児期から成人初期に至るまで、二番手であるという感情が存在し続けるきょうだいもいるため、幼児期にきょうだいと母親の関係構築を支援する必要があると考えられる。学童期には、きょうだいに理解を示してくれる人との交流を図ること、青年期には自分の感情を共有できるピアサポートグループへの参加を紹介することが必要だと考えられる。